

現代イラン女性のエマームザーデ参詣と宗教実践

平成 22 年入学

参加したフィールドスクール：タイ・フィールドスクール

調査地：テヘラン（イラン）

内山明子

キーワード：安心な食生活、持続可能な農業、流域単位のネットワーク、共生、需要と供給のバランス

1. 自分の研究テーマについて

本研究の目的は、イラン女性のエンパワーメントは日常生活の中から起こってくることを、エマームザーデ参詣の分析を通して明らかにしようとするものである。

従来、イラン女性のエンパワーメントに関する研究は政治参加等を通してそのようなことが起こっているとし、エマームザーデ参詣や宗教実践などの彼女たちの日常生活における行動を見落としてきた。また、エマームザーデ参詣の研究についても、エマームザーデを運営する側に着目しているものが多い。しかし、エマームザーデ参詣はイランにおいて男女問わず広くなされている行為であり、特に女性が日常的に参詣をおこなっていることは注目すべき点である。そこで本研究は、参詣の主体である女性を中心に扱い、彼女たちがエマームザーデを起点として形成しているネットワークについても取り扱う。女性がエマームザーデ参詣に対して持っている意識や目的の探求、そのネットワークの分析を通して、「イスラーム体制下での被抑圧者」としてのみ捉えられがちなイラン女性が、実際にはどう主体性を得ているのかを明らかにしたい。この研究によって、エマームザーデ参詣研究に新たな視座を提供するとともに、イラン女性が日常生活において何を問題と考えているのかを理解することで、その居住する地域の文化や価値体系に根差す形での解決策を提示することができると考えている。

2. フィールドスクールから得られた知見について

今回のフィールドスクールで最も印象に残ったのが、「空間の切り取り方」である。ミカン園拡大による農薬被害に苦しむファーン河流域のある町を訪れたとき、有機農業を通してその問題に取り組んでいる農家の方が「農業は自然と共にあるものだから、自然のまとまりを大切にしたい。だから、有機農業をおこなうにあたって、行政区ももちろん頭に入れなければならないのだが、ファーン河の流域という枠組みを重視している」ということをおっしゃった。地域研究において、視野を広く持つことや多角的に対象を見ることが重要だというのはしばしば言及される事柄である。しかし実際のところ、研究テーマを一面的に捉えがちだった私にとって、この言葉は地域研究の何たるかを改めて認識させてくれるものであった。

また、フィールドでお世話になった NGO の方からも、実際にフィールドへ入ることの重要性を教えてくださいました。自分の調査地であるテヘランへ既に行ってからフィールドスクールに参加していた私にとって、「フィールドで得たことは何なのか、行ったことにどんな意義があるのか」というのは、期間中つねにつきまとう問いであった。しかし、現地の人になることはできなくても、現地の人暮らしに近い生活をするのには意味があり、直に見て聞いて触れる作業は大切なのだということを知り、自分

がやってきた調査に対してポジティブな面を見出すことができた。

3. フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

フィールドスクールに参加して気付いたのは、自分がいかに狭い視野で研究テーマを捉えているかという点であった。エマームザーデ参詣という現象を見るときに、エマームザーデを起点とした広がりやを考慮できていなかったり、参詣の宗教行為という側面しか見ていなかったりしたことがわかったのである。そこで今後は、エマームザーデが形成する空間的、時間的なネットワークについても検討していきたい。多角的な視点を持つことで、エマームザーデ参詣とイラン女性との重層的な関係を描き出すことが可能となると考えられるからである。



有機農業に携わるスタッフにお話を伺う



山の斜面からホームステイ先の村を臨む



ゴールドトライアングル—タイ・ラオス・ビルマ三国の国境